函館短期大学紀要
46;105-117, 2019

函館市における社会事業史研究④
- 駅前五稜郭保育園の展開を中心として -

松田賢一、榊ひとみ、赤坂和哉、岡崎圭子

Study on History of the Social Work Projects in Hakodate City – Part4
-Focusing on the Development of EKIMAE GORYOUKAKU Nursery School-

Kenichi MATSUDA, Hitomi SAKAKI, Kazuya AKASAKA and Keiko OKAZAKI

1 はじめに

日本の幼児教育の始まりは、1876(明治9)年に設立された東京女子師範学校附属幼稚園(現在のお茶の水女子大学附属幼稚園)が最初である。日本初の幼稚園誕生から14年後の1890(明治23)年、後の保育所の原形となったといわれる「託児所」ができる。

それは、赤沢鍾美・ナカ夫妻が開設した、家塾・新潟静修学校に併設した託児施設である。すなわち、子守をしながら学校に通う子供たちが勉学に集中できるように、幼子たちを別室に集め、専任の女性保育者が保育を始めたことであった。

松本(2017)は、「この静修学校周辺は、繁華街だったこともあり、商業も盛んで、保育ニーズが高かったことから、鍾美は、1907(明治40)年「守孤扶独幼稚児保護会」(しゅこふどくようちじほごかい)の名称を掲げ、幼児教育に本格的に乗り出した。この意味は、『保育に欠ける環境の子ども(孤)を守り、独り親の幼稚児を扶(たす)け保護する会』という意味である。」と説明している。後に社会福祉法人　守孤扶独幼稚児保護会赤沢保育園となり、現在も新潟に存続している。

宍戸(2016)によると、「保育所は、すべての幼い子どもたちが平等に保育される権利を実現しようとするとともに、親たちの働く権利をも保障しようとして生まれた保育施設である。」という。さらに宍戸(2016)は、保育所誕生の系譜には、大きく2つの流れがあるという。一つは「幼稚園から保育園へ」である。1900(明治33)年、野口幽香と森島峰によって設立される貧民幼稚園と称された「二葉幼稚園」である。設立者である野口は、設立の動機を次のように語っている。

「一方では、蝶よ花よと大切に育てられている貴族の子弟があるのに、一方では、こうして道端に捨てられている子どもがあるかと思うと、そのまま見過ごせないような気がしてきました。(中略)こうした道端の子どもを集めて、フレーベルの理想通りにやってみたいという希望が期せずして若い二人の胸に湧いてきたのであります。」(幼児教育史研究2016)

明治末に、当時の内務省は慈恵・救済団体に補助金をだすようになり、二葉幼稚園もその対象となる。しかし、文部省の幼稚園規定にあわせることができなかったことから、二葉幼稚園は、文部省から内務省に切り替え・名称を「二葉保育園」とした経緯がある。

もう一つは「児童保護事業から保育園へ」である。石井十次が設立した岡山孤児院がやがて、大阪に「岡山孤児院付属愛染保育所」を設立する。石井十次が亡くなった後は、大原孫三郎に引き継がれ、財団法人石井記念愛染園が設立されていく。

このような歴史的背景を踏まえると、保育所の原形は、戦後の児童福祉法制定までは、貧しい子ども達の為、人道・博愛精神に基づく人々の慈善事業によって形成されてきたものとして理解される。

本論で筆者らが研究対象とするのは、社会福祉法人奉仕会　駅前五稜郭保育園である。保育園設立の契機は、創設者の豊田文子氏(故人:文子氏)が、新潟県長岡市から函館に来る途中、青森で戦争孤児との出会いによるものとされている。文子氏は、函館に住むようになり三人の子どもに恵まれたが「青森での戦災孤児達」のことが忘れられず、何とかあのような子どもたちの面倒をみたいという気持ちが強くなり、昭和22年児童福祉法が制定されたことも後押しとなり、当時の亀田村に初めて保育園を創設した。

文子氏の考えは、二葉幼稚園を創設した野口・

森らの設立の精神につながり、人道・博愛精神に通底している。

本論の課題は、社会福祉法人奉仕会　駅前五稜郭保育園 (以下保育園とする) が具体的にどのような経緯で設立され、現在まで発展したかを明らかにすることである。この課題を明らかにするために、関連文献、亀田市史等の資料を調査した。

2 五稜郭保育園創設者　豊田文子

文子氏は、1914(大正 3) 年 11 月 15 日、父・三間南弦、母・房代の間に三男二女の 5 人兄弟の長女として、新潟県長岡市にて生まれた。父・南弦は工業高校の教員をしており、母・房代は、小学校の教員をしていた。母・房代の実家、真敷家は、400 年以上の歴史を持つ浄土真宗「雲外寺」を守ってきた家である。

「雲外寺の歩み」(2018) によれば、その歴史は「当時の開祖は、元信濃 (長野) に居りしが永禄の頃、川中島の戦乱 (1558-1570) のため身の危険を案ずるに由なく越後に下向する。荻野前堂宮屋敷に草庵を結ぶ。元禄 4(1692) 年、今の地に移り、明和年間 (1764-1772) 本山より木像が下付され本願寺派になる。」とある。

文子氏が小学校 6 年生の時、父・南弦が中国青島の高等女学校教員として赴任することになり、一家 7 人青島に移住することになった。

文子氏は青島での生活の一部を次の様に語っている。

「青島は、第一次大戦時にドイツの支配下にあった地で赤屋根、白壁の洋館が立ち並ぶきれいな街でした。街にはドイツ人やロシア人もいましたが、それぞれ居留区があり分かれて暮らしてしました。私たち一家は日本人街に住んでいました。そのころ目撃して忘れられない記憶があります。当時、港町である青島には、街を警備する日本兵たちがいました。ある日のこと。露天商が立ち並ぶ店で、日本兵がたむろしていて、中の一人が売り物のスイカを取ってそのまま行こうとしました。店主の中国人が『金を払ってくれ』というと『ここにあるものはみな日本人のものだ』といい『こうするぞ』と言って短刀を抜いてそこにあったスイカを手あたり次第切りつけたのです。女学生であった私にとって、日本の兵隊さんは神様のような存在でしたから、日本兵がこんなことをするかとショックでした。」(道南女性史研究第 15 号 2005　p80)

文子氏は、中華民国青島日本第一小学校を卒業し、中華民国青島日本高等女学校に入学し、勉学に励んでいたが、雲外寺の住職が亡くなったことにより、文子氏が真敷家に養女に出され、寺を継ぐことになり、急遽長岡に戻り、長岡女学校に編入することになった。1931(昭和 6) 年の事である。同年長岡女学校を卒業し、文子氏は、僧侶の資格を得るために京都西本願寺に講習を受け、戻ってきてからは、女性の僧侶として、葬式や法事をこなした。1933(昭和 8) 年善徳寺の六男である弘元氏と結婚する。文子氏は 19 歳だった。しかし、夫の弘元氏が結婚 3 年後の 1936(昭和 11) 年に亡くなった。二人の子どもに恵まれるが、長女明子が 5 歳で亡くなる。夫と長女の死により、文子氏は失意のどん底にいた。その 1936(昭和 11) 年、文子氏は、中華民国青島に再び渡り、1937(昭和 12) 年 1 月から、中華民国青島日本総領事館立幼稚園に勤めることになった。

1940(昭和 15) 年文子氏は、真敷姓から旧姓の三間に戻り、富山県出身の豊田正雄氏と再婚する。正雄氏 29 歳、文子氏 26 歳であった。二人 (長男祐正・長女柳子) の子どもに恵まれた。

その後、正雄氏は、召集され戦地に行き、1946(昭和 21) 年まで戻ってこない。その間、文子氏は雲外寺を守っていくことになる。やがて長岡空襲に合う。

長岡空襲については、長岡戦災資料 (2018) によれば、次のように記述されている。

「昭和 19 年マリアナ諸島を占領した米軍は、日本国内の軍需工場を狙った爆撃を進めた。昭和 20 年 8 月 1 日、午後 10 時 30 分長岡への空襲が始まった。後に長岡市街地の 8 割が焼け野原となり、1,486 人の尊い命が奪われた空襲である。」

文子氏はその空襲の様子を次のように述べている。

「8 月 1 日の夜のこと、夏の暑い盛りなので子ども二人と祖母と、蚊帳を吊って寝入ったばかりのころ、突然ラジオがガーガーと鳴り出した。ラジオの報道は、敵機は柏崎まで来て攻撃している。すぐに長岡まで来るだろうという内容でした。急いで子どもたちを起こして防空頭巾を被り祖母が上の子の手を引き、私が下の子をおぶって庭に出ました。そのとたん、空から焼夷弾が降ってきた

のです。道へでてみると街の中心部に爆撃があったのか、大きな音がして、市中が火の海になっていました。爆撃で身体に火がついて信濃川へ逃げた人は、川の流れに流されて死んだ人が多かったそうです。覚悟を決めて椿の林に逃げて、命だけは助かりました。しかし、寺は土台しか残らず焼けてしまったのです。寺を焼かれ年寄りと子どもを抱えてこれからどうやって生活しようかと途方にくれましたが、焼け残った公会堂を檀家の人が借りてくれて、しばらくそこで過ごしました。」(道南女性史研究第 15 号 2005 p82)

夫が召集されている中、文子氏はこの難局をどうにか乗り越えた。

まもなく終戦を迎え、1946(昭和 21) 年 6 月に夫の正雄が復員した。1947(昭和 22) 年に、両親と弟妹が青島から引き揚げてきた。狭い仮住まいに大勢で過ごしていたが、夫の正雄氏は「ここにいても仕方がない、北海道へいけばなんとかなる。クワ一つ持って行こう」(道南女性史研究第 15 号 2005 p84) といい、初めは帯広に開拓農家として行くつもりで正雄氏が一人で出発し、落ち着いたらみんな家族も行くという段取りであったが、正雄氏は、帯広に行く途中で、縁があり函館の西本願寺の寺を手伝ってくれないかという話を得た。そこで、文子氏も函館に行くことになった。その道中、青森駅から青函連絡船の出航を待っている時のことである。

「祖母がなけなしの配給米で作ってくれたおにぎりを食べようとして袋を広げると、横から真っ黒い棒のような手がにゅーとでました。長い間洗っていない子どもの手で、みると小学 2・3 年生くらいの男の子でした。戦争孤児だったんでしょう。駅の周りに大勢いました。少しわけてやるとまた別の子がやってきて、そうしているうちに自分の食べる分が無くなってしまいました。この青森での戦災孤児たちとの出会いがそののち私が保育園を始めるきっかけになったのです。」(道南女性史研究第 15 号 2005 p84-85)

青森での戦災孤児との出会いは、文子氏が保育園を創設する契機となった。

2 五稜郭保育園創設

函館での住まいは、当初は東川にある本願寺西別院で過ごし、その後、千才町そして千代ケ岱にある西本願寺にて生活するようになった。慣れない土地での生活であったが、近所の人たちがとても良くしてくれたという。函館に来てから 3 人の子ども (雄峰、栄子、千春) にも恵まれた。

文子氏は、函館の生活が落ち着くと、青森での戦災孤児たちのことを思い出し、何とかあのような子ども達の面倒をみたいという強い気持ちを持つようになった。青島で幼稚園に勤務していたこともあり、文子氏が思い立ったのは保育園設立であった。戦後、児童福祉法が制定されたことも文子氏の後押しとなった。文子氏は迷わず渡島支庁に出かけ、保育園を作りたい旨の話をした。その様子が次の通りである。

「当時の課長さんは、保育園を作りたいという私の話を喜んでくれた。また、もう少ししたら国から補助金が出る事を教えてくれた。土地はあるのかと聞かれたので、借りるつもりだと答えた。当時の亀田村にキングベークが所有していた土地が 400 坪あり、社長さんが社会福祉のために使うのだから補助金がでるまで地代はいらないと言ってくれ、5 年間、ただで借りられました。」(道南女性史研究第 15 号 2005 p86)

その亀田の地に初めて保育園を作ることになった文子氏であるが、困難を極めることになる。

何しろ資金がないのである。資金がない故、土台と柱は大工さんに頼んだが、他はすべて夫の正雄氏が手掛けたのである。まさに手作りの保育園であった。図 1 の写真が設立当時の五稜郭保育園である。文子氏は、札幌に出かけ保母試験を受験し、合格し晴れて保母の資格を得ることが出来た。

図 1　設立当時の五稜郭保育園

松本 (2018) によれば、当時の保母資格については、「保育所保母資格については、戦前は特別な規定はなく、無資格者も多く存在していた。戦後児童福祉法の制定により、保育所は児童福祉施

設の一つに位置付けられ、保母の資格要件も規定された。①厚生大臣の指定する保母を養成する学校その他の施設を卒業した者　②保母試験に合格した者　③児童福祉事業に5年以上従事した者であって、厚生大臣が特に適当と認定した者。また、これまで保母資格を持っていない者も継続して保育に従事できるようにする経過措置がとられた。それは、保母資格を取得させるため、保母の養成計画として、各都道府県ごとに『保母資格認定講習会』を開催し、保母の資格を付与するものであった。これは、昭和22年から昭和25年度まで行われた暫定的な措置で、履修者17,580人に保母資格が与えられた。」とされている。

渡島支庁から五稜郭保育園が認可されたのは、1950(昭和25)年9月13日であった。(図2)
その 昭和25年の全国の保育所設置状況を見ると、公立が1,000か所、私立が2,686か所の合計3,684か所であり、児童数は、292,504人であった。(松本　2009)

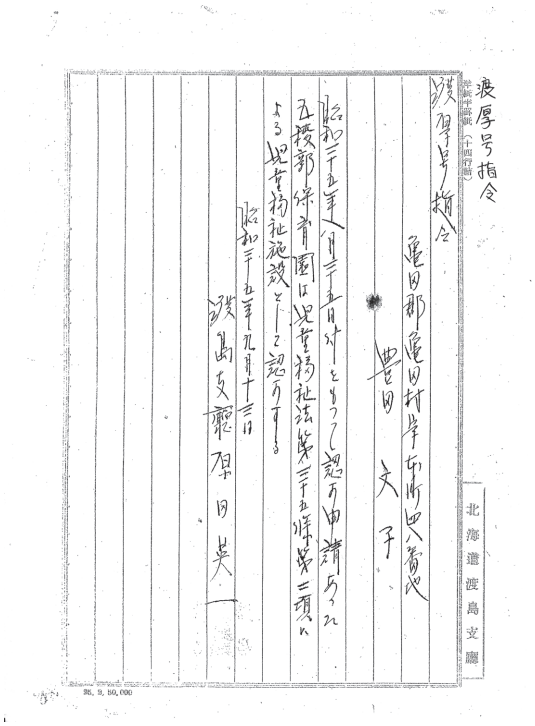
渡厚号指令
社厚第五號（十四行罫）
渡厚号指令
亀田郡亀田村字市渕四八番地
豊田文子
昭和二十五年九月二十五日付をもって認可申請ありた
五稜郭保育園は児童福祉法第三十五條第二項に
よる児童福祉施設として認可する。
昭和二十五年九月十三日
渡島支廳厚生課
北海道渡島支廳
26. 9. 50,000

図2　五稜郭保育園設立認可証

その数が、平成30年度には、保育所数(公立・私立含む)は、34,763か所で、利用児童数は、2,614,405人(厚生労働省　2018)で、この68年間で保育所の数と保育所利用児童数は、それぞれ約9倍になったことになる。保育所の需要が高まったことを物語る数字である。

念願の保育園は設立認可されたが、肝心の子ども達がなかなか集まらなかった。そこで文子氏と同僚の保母と一緒に一軒一軒訪問し子どもの募集をすることになった。当時の亀田村は、ほとんどが農家であったことから、農作業が終わる夜にでかけた。

ある家では「何言ってんのさ、うちの子は、7つにもなれば親の留守にもちゃんとストーブたいて、おつゆ温めて、とうさん、かあさんの帰り待ってるんだ。」(道南女性史研究第15号2005 p87)

当時はまだ保育園のことが良く理解されていないうえ、小さいうちから家の仕事を手伝うのが当たり前、保育園は子どもを働かせなくていいお金持ちの行くところだと思われていた。熱心に訪問し説得した甲斐があり、子どもは少しずつ増えてきた。開設から5年後の1955(昭和30)年国から補助金が交付されたが、運営の苦労は絶えなかった。

「補助金は出るには出たが、それではとても足りません。3月までの石炭代を12月で使い切ってしまう程でした。当時、先生は私を入れて3人でした。私自身の給料はもらったことがありませんが、先生方にも給料は遅配が続きました。あの頃の先生たち、本当によく協力してくれたと感謝の気持ちでいっぱいです。」(道南女性史研究第15号2005p87)

このような苦労を知った保育園の父母達が立ち上がり、石炭代の補助をもらうために、自分の仕事を休んで村議会に交渉に行ってくれた。さらには、夫正雄の協力なくして保育園の経営は成り立たなかった。

前駅前五稜郭保育園園長・大江栄子氏は、「父・正雄は、頑固で周りの方々から怖がられる存在であり、私たち子どももあまり父親との会話がなかったように感じる。しかし、園に対しては、本当に尽くしたと感じている。手が器用だったこともあり、子ども達が喜ぶ遊具、滑り台、砂場を手作りした。理事会開催の折には、正雄自らが手料理をし、理事の方々に振舞った。父親の協力なくして園の存在はありえなかったと思います。」と園でのインタビューで語っている。

また、正雄氏の孫にあたる現駅前五稜郭保育園園長の大江春樹氏は「高校時代は、汽車通学であったが、自宅に行く前に保育園に寄ると、手作りのうどんを振舞ってくれ、その味は忘れられない、やさしいおじいちゃんでした。」と園でのインタビューと語っている。

「夫は最初、保育園を始めたいと相談すると、やれるならやってみればとだけ言いましたが、実際始まってみて、色々協力してくれました。私が忙しい時は、子どものおむつを替えてくれましたし、園の為に製材会社からリアカー一杯のおが屑をもらってきて、冬の燃料にしたり、五稜郭保育園の建物に垣根を作って豆を植えたり、園庭でアヒルや鶏を飼ってくれたりして、その豆や卵が給食の食材になりました。」(道南女性史研究第 15 号 2005 p87) 夫・正雄氏は、園経営の陰日向になり、文子氏を支えていった。

文子氏は、お金がない分、教材作りには工夫を施した。紙芝居も買うお金がなかったので、同僚とお話を作り、絵を描き紙芝居を作った。子どもたちは、同じ紙芝居であったが何度でも聞いた。そのような文子氏の保育園経営に対する真摯な姿勢と熱意というものが、夫をはじめとする周りの人を動かしたのではないかと考える。

保育園設立と同時に、住まいも亀田村に移り、五稜郭保育園内で 1993(平成 5) 年まで一家は生活していた。栄子氏がその住まいを思い出し、春樹氏が作図をしたのが、図 3 である。

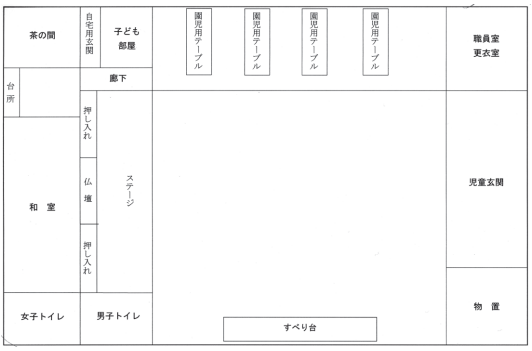

図３　五稜郭保育園での住まい

作図左側が住まいで、父母と子ども 5 人の 7 人で生活をしていたと栄子氏はインタビューで語った。

表 1 は、函館市史別巻亀田市編 (1966) を筆者が一部改変したものである。この表からは、昭和 25 年に五稜郭保育園が設立認可されるが、のち 13 年間は亀田村に他の保育所が設立されていないことが読み取れる。これは、保育所そのものへの理解度が低かったこととして解釈が可能だろう。

表 1 町内保育所一覧(昭和 45 年 10 月 1 日現在)

名称	収容人員	職員	所在地	設立年
町立鍛治保育所	60 名	5 名	鍛治 1	昭和 41 年 2 月
町立赤川保育所	60 名	5 名	赤川通 213-2	昭和 44 年 2 月
町立港保育園	60 名	5 名	港 416-5	昭和 45 年 2 月
私立五稜郭保育園	90 名	7 名	本町 47	昭和 25 年 9 月
赤川季節保育所	60 名	4 名	赤川 380	昭和 38 年 5 月
桔梗季節保育所	60 名	4 名	桔梗 219	昭和 38 年 6 月
桔梗駅前季節保育所	60 名	4 名	桔梗 332	昭和 40 年 5 月
石川季節保育所	30 名	2 名	石川 150	昭和 41 年 4 月

※函館市史　別巻　亀田市編　p869 筆者一部改変

当時の亀田村は、函館市史別巻亀田市編 (1966) によれば、「昭和 30 年代に入り、農閑期を利用し、家計収益の維持を図るため、亀田村から道内奥地へ稼働に出る季節移動労務者が増え、農繁期において著しく人手不足をきたし、農家主婦より季節保育所の設置が強く要望され、地域農協婦人部、部落運営体が主体となって季節保育所が設置された」とされている。

この季節保育所が、赤川季節保育所と桔梗季節保育所であるが、昭和 38 年に新しい保育所が出来るまでの 13 年間、五稜郭保育園が亀田村の子どもたちの保育を担ってきたのであった。

3 社会福祉法人奉仕会の設立

保育園としての形が出来上がり、保護者の理解の下、入園する子どもたちも徐々に増え、本格的に運営されていくようになった。以下、創立 30 周年誌と筆者がまとめた沿革 (表 2) を中心に整理した。

保育園設立の昭和 25 年頃には、「園舎の裏の丘は見渡す限りの草原で高台は、田んぼと畑が赤川通り (現美原町) 村役場まで続き、一眺することができた」(30 周年誌) とあり、この時期の亀田村は自然溢れる広大な大地が広がっていたことが理解できる。設立から 5 年後亀田村の人口も徐々に増え、函館市史別巻亀田市編 (1966) によれば、昭和 30 年の人口は、1 万 4,600 人、世帯数 2,601 世帯であり、前年の昭和 29 年からの比較では、人口では、614 人増、世帯数は、152 世帯増となっている。従って子どもの数も増えてきた。五稜郭保育園においては、昭和 30 年に定員も 40 名から 50 名に増員した。この地区は、

表 2 社会福祉法人　奉仕会　沿革

昭和 25 年 9 月	五稜郭保育園開設認可(9 月 13 日付)、亀田郡亀田町字本町 47 番地の 1、開設当時の状況:木造平屋柾茸 61 坪・敷地/借地 304 坪・定員 40 名　園長　豊田正雄
昭和 30 年 4 月	定員変更認可 50 名に増員
昭和 37 年 11 月	調理室・保育室・事務室の増改築と共に園舎全体の屋根を亜鉛銅板に葺き替え。床面積 79.05 坪
昭和 38 年 4 月	定員変更認可 60 名に増員
昭和 39 年 3 月	社会福祉法人奉仕会設立認可(理事 9 名、監事 2 名、評議員 19 名　理事長　豊田正雄)
昭和 41 年 7 月	老朽改築整備事業及び園舎の一部移築事業開始
昭和 42 年 3 月	老朽整備の対象となったのは、25 年に建築された 61 坪分の園舎であり、18.05 坪は移転改造した。工事完了後の状況-新築軽量鉄筋コンクリートブロック造平家建 325.03 ㎡、移築木造平家建 139.12 ㎡
昭和 42 年 4 月	定員変更認可 90 名に増員
昭和 46 年 11 月	亀田町から亀田市へ
昭和 47 年 4 月	亀田市昭和３丁目に「なかよし保育園」設立。定員 60 名　園長　豊田文子
昭和 48 年 12 月	亀田市は函館市と合併
昭和 49 年 2 月	五稜郭保育園の増築　木造モルタル　一部 2 階建 157.912 ㎡ 1 階/調理室・倉庫・便所・乳児室　2 階/事務室・会議室・管理人室
昭和 49 年 4 月	定員変更認可 120 名に増員 五稜郭保育園を名称変更し「駅前五稜郭保育園」と改称。(函館市との合併により、同じ名称の保育園が２か所となった為改称)
昭和 52 年 2 月	なかよし保育園増築により定員を 90 名に変更
昭和 53 年 1 月	函館市富岡町２丁目に「風の子保育園」を設立。定員 90 名 園長　豊田文子
昭和 53 年 3 月	「なかよし保育園　園長豊田文子」を豊田雄峰に変更
昭和 63 年 11 月	「風の子保育園　園長豊田文子」を江藤孝夫に変更
平成　5 年 12 月	函館市区画整備事業により園舎を現在地に移転新築
平成　6 年 4 月	駅前五稜郭保育園定員を 90 名に変更
平成 10 年 4 月	社会福祉法人奉仕会理事長豊田正雄を江藤孝夫に変更 駅前五稜郭保育園園長豊田正雄を大江栄子に変更 なかよし保育園園長豊田雄峰を豊田光佐に変更

	風の子保育園園長江藤孝夫を豊田雄峰に変更
平成 18 年 12 月	なかよし保育園園舎を新改築し、定員を 120 名に変更
平成 27 年 4 月	なかよし保育園定員を 140 名に変更
平成 28 年 4 月	駅前五稜郭保育園園長大江栄子を大江春樹に変更
	なかよし保育園園長豊田光佐を豊田リカに変更
	風の子保育園園長豊田雄峰を佐藤紀美子に変更
平成 28 年 10 月	風の子保育園老朽化により園舎を新改築

※ 「翔け　はばたけ子どもたち創立 30 年の歩み」、各保育園沿革から筆者が一覧にした。

さらに人口が増加し、昭和 38 年には、23,800 人になり、8 年間で 9,200 人増えたことになる。保育園も人口増に従い定員を 60 名とした。

昭和 39 年には、社会福祉法人奉仕会を設立し認可された。文子氏が青森の戦災孤児を思い五稜郭保育園を設立した昭和 25 年から 14 年後のことであった。初代理事長には、文子氏の夫である豊田正雄氏が就任した。

昭和 25 年に設立された保育園の建物も老朽化し、昭和 41 年には、改築一部移転事業が開始され、昭和 42 年新築軽量鉄筋コンクリートブロック造平家建 325.03㎡、移築木造平家建 139.12㎡の園舎が完成した。亀田町は、昭和 41 年には人口が 3 万人を突破した。五稜郭保育園は、昭和 42 年に定員を 90 名に増員した。このような人口増に伴い、文子氏は、父母の要請もあり、幼稚園を作ることになった。「親御さんには、保育園も幼稚園も区別がなく、とにかく子どもを預ける所が足りなかった。まるで保育園の延長のような幼稚園でした。夫が奔走してくれ、昭和 41 年、350 坪の土地をやっと借りて『太陽の子幼稚園』を開設した。」(道南女性史研究第 15 号 2005 p89)
こうして、文子氏は、学校法人である幼稚園をも経営することとなった。
その後も亀田町は人口が増え続き、昭和 45 年 9 月 22 日に 5 万人を突破し、5 万 623 人となった。この数字は「道内町村人口最高の登別町 (4 万 1800 人) を抜き、道内第一位」(函館市史別巻亀田市編 1966) となった。
昭和 46 年 11 月 1 日「亀田町」は「亀田市」となった。

昭和 47 年には、社会福祉法人奉仕会は、人口増が顕著な地域である、亀田市昭和 3 丁目に「なかよし保育園」(定員 60 名) を設立する運びとなった。

昭和 48 年 12 月 1 日「亀田市」は「函館市」と合併した。昭和 49 年五稜郭保育園を増築し、木造モルタル　一部 2 階建 157.912㎡とし、1 階に調理室・倉庫・便所・乳児室、2 階には、事務室・会議室・管理人室を備えた。同年 4 月定員を 120 名に増員し認可された。また、亀田市の函館市との合併に伴い、同じ名称の保育園が 2 か所となったことから、五稜郭保育園の名称を現在の「駅前五稜郭保育園」と改称した。

昭和 53 年人口増の函館市富岡町 2 丁目に「風の子保育園」が設立された。

このように昭和 25 年手作りで手探り状態から出発した五稜郭保育園だったが、時代の要請と文子氏の先見の明により、3 園の保育園を抱え、旧亀田地区にはなくてはならない社会福祉法人として成長し現在に至っている。

4 社会福祉法人奉仕会
駅前五稜郭保育園創立３０周年

1981(昭和 56) 年、社会福祉法人奉仕会駅前五稜郭保育園は、幾多の試練を乗り越え、創立 30 周年を迎えた。豊田正雄氏 70 歳、豊田文子氏 67 歳である。

以下、「翔け　はばたけ子どもたち　創立 30 年の歩み」の冊子を参考に整理をした。

30 年誌の表紙をあけると文子氏の「30 年の歩みを綴るにあたって」という巻頭言がある。以下に、その巻頭言を引用する。

「亀田郡亀田村字本町に、この保育園が生まれましたのは、昭和 25 年 9 月でありました。振り返ってみますと終戦後の混乱期が未だおさまらず、当時の日本の社会福祉は、現在では想像も及ばぬ貧困さで未熟なものでありました。従って創

立したものの、苦難の連続でございました。こうした当時の保護者の方々が「父母の会」を結成して立ち上がり、世論に訴え、行政を動かし地域住民の方々と共に支援の手をお貸しくださいまして今日に至っております。又、創立当時より歴代の職員の方々も乏しい教材の中を薄給に甘んじ、園長と共に辛酸をなめ、献身的な奉仕を頂きましたことも尊い記録として残るものでございます。」

次項には、理事長兼園長である正雄氏の言葉が掲載されている。以下引用する。

「朝　7時40分　『先生、おはよう』の声が元気に弾んで園舎が明ける。赤いホッペの女の子、眉の凛々しい男の子、みんなみんな精いっぱい遊んで大きくなれよ。世界の果てまで雄飛して存分にはばたけ、未知の世界が君達の力を待っているのだ。子供達の笑い声に囲まれて30年が過ぎ、只ただすこやかな成長を祈り続けてすごした年月でした。躍進する日本に生まれて、将来を担う子供達を育てるよろこびを生きがいとして、微力を尽くして参りたいと思っています。」

1947(昭和22)年に児童福祉法が制定され、保育所が児童福祉施設として位置づけられた。1947(昭和22)年から1954(昭和29)年は、「戦後保育所の草創期」と言われた時代である。即ち、混乱した社会情勢、困窮した生活の中で保育を開始し、戦後の焼け跡から立ち上がっていく時期と重なる。五稜郭保育園の実質の創立者である文子氏の巻頭言の言葉は、このような実情を現した言葉であろう考える。理事長兼園長の正雄氏の言葉は、夫妻の娘の栄子氏は、「父は怖がられた存在」だと言っていたが、実のところは文子氏の保育園経営に対する、最大の理解者であり、五稜郭保育園に通ってくる子ども達の幸せを常に考えていた、慈愛に満ちた言葉であるものとして受け止められる。

次に五稜郭保育園を文子氏と共に働き園を支えた保母の言葉を以下に整理した。

五稜郭保育園初代保母藪下(旧姓細田)カチ子氏

「一口に30年と申しますが、終戦の物資不足から時代は大きく変わり、私が勤めておりました当時は、足ふみオルガン1個、園児数40名から50名という中で、初代保母見習いとして奥様ともども苦労したことが昨日のように思い出されます。今は、衣食住共に不自由のない時代になりましたが、あの頃はそういうわけにはいかなかったものです。私が下駄ばきで通園して、20日もすると、鼻緒が切れるまえに下駄がへって、ペッタラ下駄になり年頃であった私が、えらく気にしたものでした。奥様の熱心な幼児教育の姿に感動し、お手伝いが出来た事を心から感謝をいたしております。」

高橋和子氏

「私が勤務しましたのは、33年頃からでした。当時五稜郭保育園は、60名近い園児と豊田主任と保母2名の保育の場でした。玄関の両側に幼児の寝室と石炭置場、本堂の両側には幼児の机があり、長いブランコとすべり台が置いてありました。遊具といえば、これくらいでしたが、その頃あのあたりは畑があったくらいでしたから四季に渡って自然の教材には不自由しなかったことが救いでした。保母の指導書も少なく、歌等豊田先生から聞き覚えがほとんどで『ののさま』の歌をオルガンで弾けるまでになるのには、随分時間がかかったものでした。」

江藤勝江氏

「早くから幼児教育の必要性を説き、あらゆる困難を克服して現在に至った理事長ご夫妻の信念には、全く敬服のほかございません。『この子らに幸せを』と願って30年余り、どんなにか苦しみのため途中で投げ出したいと思ったこともございましょう。しかし夫婦の根底にある愛情をかたくなまでに守り続けた成果が今日あらしめたものと信じる一人です。」保育園設立草創期の苦労が伝わる三人の言葉であろう。

松本(2009)は、「託児所」から「保育所」への転換の過程において、継承されたことと新しく変わったことについて、「児童福祉法の制定により、公的責任による保育が開始されたが、当時の保育所の設立・運営は、多くは民間の保育所、保母たち一人一人の尽力なくして成立しなかった。児童福祉法が制定されたとはいえ、その理念を理解する者は、ごく限られた者であり、実際の保育現場や社会の状況は、疲弊と混乱のなかで生活していくことが精一杯であった。」と述べている。

昭和25年当時は、戦争が終わりまだ5年しか経過しておらず、まだまだ日本は混乱の中の真っただ中におかれていた。保育所の運営についても、手探りの状態から出発した。物が豊かでない中、五稜郭保育園も児童福祉施設として出発していく

が、勤めていた保母らの支えになったのは、豊田夫妻の幼児教育に掛ける情熱であったことが手記から読み取れる。

また、当時の保母である高橋氏の文の中に「保母の指導書も少なく」とある。

1952(昭和 27) 年に「保育指針」が発行された。これは、児童福祉施設としての保育所の運営の在り方についての基本的な指針を示すものであり、その主な内容について、松本 (2009) によると、「保育指針の目次を見ると、保育の目標と原理に始まり、環境や身体機能の発達、精神発達、生活指導、遊びの指導、言語、描画、音楽リズム、読書や映画という項目も記されている。また、保育計画の立案や問題の解決方法について、さらに、『爪かじり』『仲間はずれ』などの問題行動ごとの項目が建てられている。」とある。

保育指針は、昭和 25 年に五稜郭保育園が設立された、2 年後に発行されたが、全国の保育所にどのくらい配布されていたのか定かではないが、高橋氏が勤務していた時代は、昭和 33 年頃と推察されるため、予想するに保育に関わる書物が世の中に数多く流通していなかったことが理解できる。

30 周年誌から五稜郭保育園の歴史の一端を整理したが、その他、豊田夫妻は、写真を沢山保存していた。現園長の春樹氏が整理してくれた数点を紹介する。図 4 は、保育園創立当時の亀田本町 47 番地の現在の様子である。図 5 の写真は昭和 26 年第 1 回お遊戯会の記念写真であり、左後方が文子氏、右に正雄氏である。

図 6 の写真は、昭和 32 年の卒園式。図 7 の写真は、創立 20 年に当たる昭和 46 年すみれ組の記念写真。そして、図 8 の写真は、平成 5 年　園をバックに映した豊田夫妻である。この時、正雄氏は 82 歳、文子氏は、79 歳であった。

図４　保育園創立当時　亀田本町 47 番 10

図６　昭和３２年卒園式

図５　昭和２６年　第１回お遊戯会

図７　昭和４６年６月すみれ組記念写真

図８　平成５年豊田夫妻

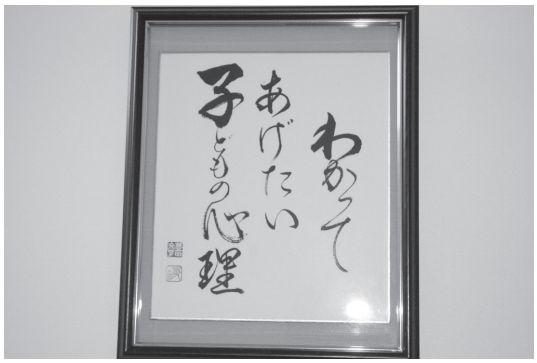

図９　文子氏の書

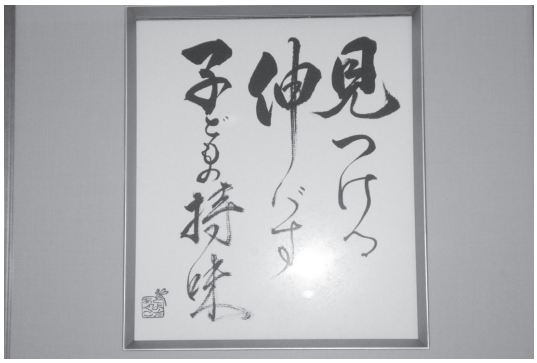

図 10　文子氏の書

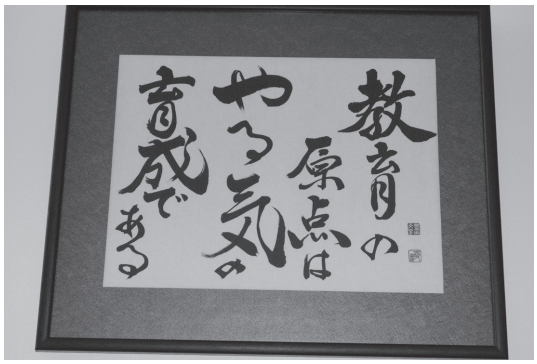

図 11　文子氏の書

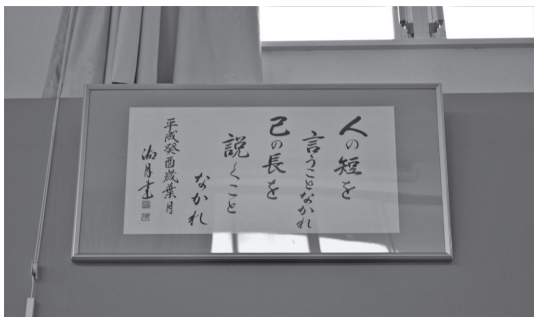

図 12　文子氏の書

５ まとめ (創立 70 年から未来へ)

2020 年に駅前五稜郭保育園は、創立 70 年を迎える。現在、社会福祉法人奉仕会の３園は、創立時代の園長から孫世代等に引き継がれている。駅前五稜郭保育園は、３代目の園長で創立者豊田夫妻の孫にあたる、大江春樹氏が、なかよし保育園は、豊田夫妻の息子豊田雄峰氏の子どもである豊田リカ氏が４代目の園長となっている。風の子保育園は、駅前五稜郭保育園で主任保育士をしていた佐藤紀美子氏が４代目の園長として、創立者である豊田夫妻の意志を引き継いでいる。

豊田正雄氏は、平成 11 年３月 15 日社会福祉法人奉仕会の発展を見届け 88 歳で永眠した。文子氏は、平成 28 年 11 月 22 日　102 歳の天寿を全うし旅立った。

勉強熱心な文子氏は、晩年、書道を独学で学び、その書を卒園する子どもたちに額に入れ贈っていた。

その何点か紹介する。図９「わかってあげたい子どもの心理」、図 10「見つける伸ばす子どもの持ち味」、図 11「教育の原点はやる気の育成である」。また、駅前五稜郭保育園の正面玄関を入る

と直ぐ、お遊戯室がある。その正面に、次のような書が掲げられている。「人の短をいうことなかれ　己の長を説くことなかれ」(図 12) である。これら書の言葉は、文子氏が長年保育・教育に携わってきた中で、自分の信条として培われた言葉であると推察する。

さらに、園に通って来る子ども達の幸せと子どもの未知の可能性を信じ、その大切な時期に子どもを預かる使命と責任を痛感し、保育士に対しては、常に謙虚な気持ちと生涯学び続ける心を持って欲しいと願っていたのではないだろうか。文子氏は、保育園 3 園と幼稚園 2 園を創設し、その時代のニーズに応え、ひたすら子どもの幸せを願って保育・教育に邁進した。

それぞれの園が順調に運営されていたころ、文子氏は、次のような言葉を残している。

「私にとって五稜郭保育園が原点だと思っています。それまで、大変な時期があって『何でこんな因果なことをはじめたのだろう』と思ったこともありましたよ。今までやってきて、ああすればよかった、こうすればよかったと後悔することもあります。でも、私にはこれしかできることがないから続けるしかないと思って今までできました。夫ともよく口喧嘩しましたが、それだけ保育園のことを思って一生懸命やってくれたからだと今にして思います。」(道南女性史研究第 15 号 2005 p89)

まもなく平成 30 年度の卒園式が挙行されようとしている。駅前五稜郭保育園は、今年度で第 68 回目の卒園式となる。現園長の春樹氏が駅前五稜郭保育園の卒園児数をまとめてくれた。それが表 3 である。1,788 名の園児が駅前五稜郭保育園を巣立っていくことになる。

本研究を通して、明らかにされたことは、文子氏が新潟県長岡市から縁もゆかりもない北海道に渡ろうとしていた、青森での戦争孤児との出会いが発端となり、亀田地区に初めて保育園を創設したことである。まだ戦争の傷跡が各地の残り、明日の生活もままならないような時代であったが、函館で落ち着いた生活をし始めたころ、青森での戦災孤児との出会いが忘れられなく、戦災孤児のように大人に見守られることの無い子ども達を何とかして守りたいという慈愛に満ちた精神により、一念発起し手作りの保育園を昭和 25 年に創設したのである。その保育園設立に際し、夫である正雄氏が土地を探しに奔走し、やがて文子氏の一番の理解者となり、未来ある希望に満ちた子どもたちの為、生涯を保育に捧げていくことになった。

筆者は、駅前五稜郭保育園第 2 代園長である大江栄子氏に「社会福祉法人奉仕会」という名称はどなたがつけたのでしょうかと質問をした。

栄子氏は「社会福祉法人奉仕会という名称は、だれが名付けたかは母から聞いていませんが、たぶん、人の為に何かをしたいという気持ちがとても強い夫婦でしたので、一番適した名称だと今は感じています」と答えてくれた。

奉仕とは、広辞苑 (第 5 版　岩波書店) によると「献身的に国家・社会の為につくすこと」とある。

太陽の子幼稚園の教育理念を拝見する機会があった。そこに次のようなことが記載されていた。

「慈愛と感謝 生きとし生きる者みな太陽の恵みに生かされていることを知り常に感謝を忘れず慈愛の心をもって人を許し包容できる人間性を養う」

保育に対し全くの素人であった豊田夫妻が保育園経営をする土台は、二人の共通点である「寺」に由来しているのではないかと考える。人の生涯を見届けるお寺での生活境遇を通して、社会に尽くすこと、それも生かされていることを根本とし、慈愛の心で人に接することを知らず知らずに備わったと推察する。

豊田夫妻は、子ども達一人一人の可能性と育つ力というものを信じ、それを尊重し、慈しみの心で子ども達の成長を見守り、保育という仕事に献身的に尽くした生涯であったと感じた。

謝辞

社会福祉法人奉仕会 駅前五稜郭保育園園長大江春樹氏には、研究に賛同していただき貴重な資料等を提供して頂いた。また、前駅前五稜郭保育園園長の大江栄子氏には、当時の貴重なお話を賜ったこと、衷心より深謝申しあげる。

引用・参考文献

1）汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子 (2017). 日本の保育の歴史
萌文書林　98-100.

表3　駅前五稜郭保育園　卒園児数

	卒園年度	年月	児童数			卒園年度	年月	児童数
	昭和25年度				第39回	平成元年度	平成2年3月	40
第1回	昭和26年度	昭和27年3月	5		第40回	平成2年度	平成3年3月	30
第2回	昭和27年度	昭和28年3月	9		第41回	平成3年度	平成4年3月	31
第3回	昭和28年度	昭和29年3月	10		第42回	平成4年度	平成5年3月	31
第4回	昭和29年度	昭和30年3月	12		第43回	平成5年度	平成6年3月	20
第5回	昭和30年度	昭和31年3月	13		第44回	平成6年度	平成7年3月	24
第6回	昭和31年度	昭和32年3月	25		第45回	平成7年度	平成8年3月	15
第7回	昭和32年度	昭和33年3月	37		第46回	平成8年度	平成9年3月	19
第8回	昭和33年度	昭和34年3月	30		第47回	平成9年度	平成10年3月	22
第9回	昭和34年度	昭和35年3月	25		第48回	平成10年度	平成11年3月	19
第10回	昭和35年度	昭和36年3月	19		第49回	平成11年度	平成12年3月	21
第11回	昭和36年度	昭和37年3月	30		第50回	平成12年度	平成13年3月	17
第12回	昭和37年度	昭和38年3月	28		第51回	平成13年度	平成14年3月	27
第13回	昭和38年度	昭和39年3月	20		第52回	平成14年度	平成15年3月	24
第14回	昭和39年度	昭和40年3月	56		第53回	平成15年度	平成16年3月	26
第15回	昭和40年度	昭和41年3月	52		第54回	平成16年度	平成17年3月	25
第16回	昭和41年度	昭和42年3月	19		第55回	平成17年度	平成18年3月	17
第17回	昭和42年度	昭和43年3月	27		第56回	平成18年度	平成19年3月	20
第18回	昭和43年度	昭和44年3月	29		第57回	平成19年度	平成20年3月	20
第19回	昭和44年度	昭和45年3月	31		第58回	平成20年度	平成21年3月	21
第20回	昭和45年度	昭和46年3月	25		第59回	平成21年度	平成22年3月	14
第21回	昭和46年度	昭和47年3月	35		第60回	平成22年度	平成23年3月	20
第22回	昭和47年度	昭和48年3月	23		第61回	平成23年度	平成24年3月	22
第23回	昭和48年度	昭和49年3月	34		第62回	平成24年度	平成25年3月	20
第24回	昭和49年度	昭和50年3月	41		第63回	平成25年度	平成26年3月	23
第25回	昭和50年度	昭和51年3月	35		第64回	平成26年度	平成27年3月	18
第26回	昭和51年度	昭和52年3月	39		第65回	平成27年度	平成28年3月	18
第27回	昭和52年度	昭和53年3月	47		第66回	平成28年度	平成29年3月	21
第28回	昭和53年度	昭和54年3月	37		第67回	平成29年度	平成30年3月	20
第29回	昭和54年度	昭和55年3月	39		第68回	平成30年度	平成31年3月	15
第30回	昭和55年度	昭和56年3月	35					
第31回	昭和56年度	昭和57年3月	39					
第32回	昭和57年度	昭和58年3月	32					
第33回	昭和58年度	昭和59年3月	26					
第34回	昭和59年度	昭和60年3月	35					
第35回	昭和60年度	昭和61年3月	40					
第36回	昭和61年度	昭和62年3月	28					
第37回	昭和62年度	昭和63年3月	32			卒園児童数計		
第38回	昭和63年度	平成元年3月	29			1788		

2）宍戸健夫 (2016). 保育園 (保育所) の歴史の中で「若竹の園」を考える　幼児教育史研究　第 11 号　33-34.
3）浄土真宗本願寺派雲外寺 (2016). みんなのお寺　雲外寺の歩み　信州から越後へ　明治からの記録　18-19, 91-92.
4）長岡空襲 (2018). 長岡市役所　https://www.city.nagaoka.nigata.jp（2019 年 2 月 25 日閲覧）
5）松本なるみ (2009). 戦後草創期の保育所 元保育所保母の語りを手がかりに　文京学院大学人間学部研究紀要　Vol.11 191-202.
6）函館市史別巻亀田市編 (1978). 函館市 860,877-922.
7）道南女性史第 15 号 (2005). 道南女性史研究会 79-91.
8）社会福祉法人　奉仕会パンフレット
9）翔け　はばたけ子どもたち創立 30 年の歩み (1981).　社会福祉法人駅前五稜郭保育園 1,7,13,19.
10）一般社団法人全国保育士養成協議会監修 (2018). 保育者のための児童家庭福祉データブック 2019. 中央法規　34-35.
11）広辞苑第 5 版 (1998). 岩波書店　2430.
12）輝くこどもたち (1985). 創立２０周年記念誌　太陽の子幼稚園　3-9.